

研究ノート

バートンにおけるジェネラル・バプテスト 「ニュー・コネクション」の起源

村 椿 真 理

The Origins of the New Connexion of General Baptists in Barton

Makoto Muratsubaki

キーワード：

18世紀イングランド・バプテスト、ジェネラル・バプテスト、ニュー・コネクション

はじめにー

- 18世紀のジェネラル・バプテスト
- 1、バートンのバプテスト派の潮流
- 2、デーヴィド・テイラーの動向
- 3、ジョン・テイラーの働き
- 4、バートンの諸派とサミュエル・ディーコンのバプテスト教会誕生まで
- ジョン・オールドリッジ
- ジョン・ワイヤット
- ウイリアム・アルト
- ウイリアム・ケンドリック
- スティーヴン・ディクソン
- ジョーゼフ・ドニスソープ
- サミュエル・ディーコン（シニア）
- サミュエル・ディーコン（ジュニア）
- 5、バートンのニュー・コネクションの相互バプテスマ執行について
- 6、バートンに生まれたジェネラル・バプテストの特徴

おわりに

はじめにー

18世紀のジェネラル・バプテスト
18世紀、イングランドのバプテスト教会

は、理性主義、合理主義、啓蒙思想といった時代の影響を受け、停滞を余儀なくさせられていたが、ジェネラル・バプテストは、特にアリウス主義者（Arians）やソツツィーニ主義者（Socinians）の影響を受け、教勢は低下の一途をたどった。またこの時代、ユニテリアン思想一般への急激な接近が見られた。この時期、ジェネラル・バプテストは全体的に教理論争や関係協力機関の古い制度の弊害もあり、福音伝道に対する熱意も失われて、弱体化していた。ところが1739年以降、イングランド国教会内の信仰覚醒運動（Revival Movement）がジョン・ウェスレー兄弟によって始まると、その影響は次第にバプテスト教会にも感化を与え、特に福音主義的・修正アルミニウス主義の立場を唱えたジョン・ウェスレーの思想は、一部のジェネラル・バプテストに高く評価されるに至った。その結果、福音主義的な新しいジェネラル・バプテストの教会群が誕生したが、この研究ノートは、これまで日本では紹介されたことのなかったバートンの「福音主義的ジェネラル・バプテスト」誕生の経緯を紹介しようとするものである。

この新しい教会群は、後述するニュー・コネクションを形成する重要な一構成員となるのであるが、ウェスレー主義の大きな影響下に発生したとはいえ、さらに広い敬虔主義

諸教会の影響を受けたものである故に、ここでは便宜上「福音主義的ジェネラル・バプテスト」と呼んでおくことにする。即ち、1730年から1760年にかけて、西ヨーロッパで起った一種の宗教的感情主義（religious emotionalism）が背景にあったことは確かであり、ウェスレー兄弟をも導いたモラビアン運動なども、このバートンでは新しいジェネラル・バプテストを生み出す一翼となっていたことが確認されるからである。もう一つの重要なニュー・コネクションの構成員を成したのはヨークシャー、ハリファックスの、メソジストからバプテストに転向したダニエル・ティラー率いるジェネラル・バプテスト教会群であった。しかしここではその起源などは別のテーマとなるので取り扱わない。

1. バートンのバプテスト派の潮流

そもそもこの新しいジェネラル・バプテストの起源には、メソジスト運動をドニントン・パーク近隣の教区（地域）に広めたハンティンドン伯爵夫人（Lady Huntingdon）の影響があったことが知られている。

Barton in the Beans はその一拠点であったが、ノッティンガムシャーのハグレスコート、マークフィールド、ラットビー、ロングフォード、スタントンの村々（villages）を含み、パッキングトン、キャッスル・ドニントン、ケグワース、北西レスター・シャーのコーン&ヒンクリーとマーケット・ボズワース、メルボルン、マーシャム、ラフバラ、ノッティンガムシャーのイースト・レイクなどに接する一地域である。

バートンは、コーン&ヒンクリーとマーケット・ボズワース地区に隣接し、かつてはビーンズ（Beans「そらまめ」）のバートンとも呼ばれていた。「豆」をラテン語で abi と言うが、複数形では fabis であり、現在では一般に「ファビスのバートン」として知られている。

初めはそこにメソジストの群れ（ミーテ

ィングハウスや多くのSociety）が誕生したが、やがてバプテスト教会が誕生していく。そしてこのグループこそが、後に（1770年）ジェネラル・バプテストのニュー・コネクション（New Connexion）として広く知られるようになった二つの潮流の第一の教会群となったものであり、初期はごく小さな非国教派の群れに過ぎなかった。¹ なお、この研究のために参考にした主要文献は次の通りである。重要な文献なので、はじめにこれを明記しておく。

- ・A.C.Underwood, A History of the English Baptists.1947,pp.152-4.
- ・A.Betteridge, Barton in the Beans, Leicestershire: a source of Church Plants, Baptist Quarterly,36(1995),pp.70-79.
- ・R.W.Ambler, CHUCH, PLACE, AND ORGANIZATION: The Development of the New Connexion General Baptists in Lincolnshire,1770-1891, Baptist Quarterly,37 (1998),pp.240-241.

2. デーヴィド・ティラーの動向

18世紀末にジョン・ディーコン（John Deacon）により出版されたジェネラル・バプテストマガジンの二巻本に、このグループの初期の情報が散見される。² 今回は上記の主要文献の他、主にそれらを参考資料にして、バートンにおけるバプテスト教会の誕生に関する歴史解明を試みる。

それによれば、1739年7月、ウェスレー主義の熱心な賛同者となったハンティンドン伯爵夫人、セライナの使用人、デーヴィド・ティラー（David Taylor）により、後にニュー・コネクションの重要なグループを構成するレスター・シャーの会衆が生み出されたという。³

ティラーはセライナとのつながりの中で、メソジスト派の牧師の影響を受け、やがて専従（full-time）のEvangelist（メソジスト信徒説教者）となった。しかしティラーは後に自身の「常規を逸した行動」の故に、メソジ

ストのグループからもモラヴィア派の仲間からもその言動を問題視され、結果その地を去ることとなった。ここで何が真相であったかは不明のままであるが、以下の資料にその言及がある。

D.Benham,Memoirs of James Hutton comprising the annals of his life and connections with the United Brethren,p.120,1856.

これによるとティラーは、モラヴィア兄弟団の人々を賞賛する説教をしたかと思えば彼らを批判する様な話を平然と行ない、ついに兄弟団の人々を怒らせてしまったという。両派のグループから、その不安定な態度と言動が指摘され、ついに彼は両派から受け入れられなくなったというのである。しかしこの問題が起こるまで、ティラーは基本的にはメソジストの説教者として、レスター・シャーの初期の信仰復興運動の主要なリーダーとして活躍したのであり、その功績は広く認知されているといえる。

3、ジョン・ティラーの働き

デーヴィド・ティラーの働きを助けた人物にジョン・ティラー（John Taylor）がいた。彼は1742年の春、北イングランドにおいてジョン・ウェスレーの感化を受けた人物であり、正式に任職されてはいなかったがグロスター・シャー、レスター・シャー、ダービー・シャーなどで信徒説教者として活躍していた。当時メソジストは積極的に信徒伝道者を起用し、各地に派遣していた。同年10月、彼はロンドンのホイットフィールドのタバナクル（会堂）で、ハウエル・ハリス（Howell Harris）の説教を聴き、メソジスト信仰に接近したため、ハンティンドン伯爵夫人、セライナの支援を受け、ラットビーに小さな学校を設立し、そこを拠点に宣教活動を開始した。彼はそこから近隣の村々へ出かけては巡回説教を試みたが、2年後に、ファビスのバートン（Barton in Beans）に活動拠点を移した。彼はその地で多くの農民に信仰を伝えたが、

そこでデーヴィド・ティラーの伝道を結果的に支援することとなった。重要なことは、そのメンバーの中に、後のリーダーとなったジョン・オールドリッジ（John Aldridge）、大工のジョン・ワイアット（John Wyatt）らが含まれていたことである。

またこの中に、さらに2人の新しい信徒説教者が生まれた。カルヴァニストのウィリアム・アルト（William Allt or Ault）であり、モラヴィア派に傾倒していたウィリアム・ケンドリック（William Kendrick）であった。⁴

こうしてバートンには初期のメソジスト派だけでなく、アルミニウス主義のオールドリッジ、カルヴァニズムのアルト、元来ジョン・ウェスレーに大きな感化を与えたモラヴィアンに属していたとされるケンドリックなどと、多彩な背景に根差す諸グループが誕生したのであった。⁵

4、バートンの諸派とサミュエル・ディーコンのバプテスト教会誕生まで

バートンは元来国教会の教区のひとつであったが、このようにして徐々に非国教派の占める地域へと変化したことが伺える。特に1689年の「寛容令」（The Toleration Act）以後、ここはプロテスタント・ディセンターズの中心地の一つと化したが、先のリーダーによってそれぞれの仲間（追隨者のグループ）が形成された。多くの村人達が国教会から離脱したが、この時代、こうした非国教派の説教者はしばしばその反対者の攻撃にもさらされており、暴力事件が頻発していたという。オールドリッジ、ワイアット、そして後述する、後のバプテスト教会のリーダーとなったサミュエル・ディーコンらがこの地で活動したのである。

さて、この間のことをさらに詳しく調べてみると、ケンドリックはやがてカルヴァニズ

ムの影響を受け、スティーヴン・ディクソン（Stephen Dixon）らと独立派の会衆（教会）を形成した。但しこのディクソンは一時モラヴィアンに傾倒し、デーヴィド・テイラーとも行動を共にしたが、ディクソンは最終的にはウィリアム・ヴィドラー（William Vidler）など普遍救済論者（Universalist）の群れへと転向していった。

そしてこの時期（1745年）バートンに、「成人バプテスマ（immersion）の教説に立つ会衆」が誕生している。⁶アルミニウス主義に立っていたオールドリッジはやがてアルトの立場（カルヴィニズム）に転向し、ケンドリック、サミュエル・ディーコン、ワイヤット、ジョゼフ・ドニスソープ（Joseph Donisthorpe）など、それぞれの群れから、バプテストの自覚に至った会衆が誕生したと推定される。1745年以降のことである（ちなみに、当時バプテスマを受けた浸礼所の遺跡が、今日のファビスのバートンには複数残されている）。

この会衆は1755年11月までに、他のバプテストと接触することなしに、独自に「信仰者バプテスマ」を採用するようになり、この時点以後、複数の前述のリーダーを主席牧師とするバプテスト教会が形成されたと伝えられる（彼らは自らを積極的にバプテストと称した）。しかしその後、1760年には、ウィリアム・ケンドリックは、詳細は伝えられていないが、軽犯罪を犯したなどで（おそらく暴力事件）、ジョン・オールドリッジ、ジョン・ワイヤット、ジョゼフ・ドニスソープらのもとを離れ、この地に誕生したジェネラル・バプテストから完全に追放された。⁷

ラットビー（Ratby）のサミュエル・ディーコン（Samuel Deacon, Sr., 1714-1812）は、初めは農園労働者であったが、その後、食品雑貨店の店主となり、最後は毛織物職人（wool-comber）となった所謂、俗人説教者であった。彼はそもそもデーヴィド・テイラ

ーの影響を受けた人物であった。バートン・ミーティングハウスの公の記録には、1751年まで名前が見当たらない。しかし他の言及によれば、1741年にはテイラーの仲間となっていたともされ、1767年にディーコンの仲間の牧師たちと教理論争があった後、オールドリッジがバートンの牧師職を辞した後も、バートンの会衆の中に留まり、一信徒として活躍していた。⁸彼が明確な自覚を持ってバプテストの牧師職を担うことになったのは、彼が68歳の時、即ち1782年のこととされる。それまでバプテストの会衆の一員であったと推測されるが、信徒説教者となったのはこの時である。

ところが、ジョン・ワイヤットは習慣的飲酒が周囲から批判され、除名処分を受けてバートンの群れを去った。またジョゼフ・ドニスソープは、1774年に病により死没してしまう。こうした事情により、バートンのバプテスト教会の指導的人物は、最終的にサミュエル・ディーコンただ一人となり、彼が結果的にこの地のバプテスト教会の主席牧師、代表者に任命されることとなった。

彼の息子、Samuel juniorは、ジョゼフ・ドニスソープにあらゆる意味で感化を受け、その地で時計職人（clockmaker）をなりわいとしていた（1951年までこの家業は継続したという）。彼は父親に倣い、1777年からバートンで説教し、父子二代でバートンのバプテスト教会を活性化させた。ジュニアは2年後の1779年にハグレスコート（Hugglescote）で信徒説教者に正式に任職されている。⁹

この群れはこの時期会員が増えており、1755年5月頃から、ノッティンガムシャー、スタッフオードシャー、ダービーシャーなどに分蜂し、60年代末には、5教会に広がり、1770年にはこのグループだけで6教会、900名を越える信徒を擁するまでに成長したとされる（右上の表を参照）。

但しこの地の多くの教会は、どこも貧し

	Pastors	Deacons	Elders	Members
Barton	2	5	2	120
Longford Hinckley	2	4	1	170
Melbourne	2	5	2	160
Kegworth	2	6	3	180
Loughborough	2	5	1	240
Kirkby Woodhouse	-	-	-	30

Statistics for the New Connexion Churches in 1770

い会衆から成っており、教会建築のために女性たちは自分の結婚指輪まで売り払ったほどであったという記録も残されている（Department of Manuscripts, Nottingham University, Mr R 1 , Records of Nottingham, Mansfield Road Baptist Church. 参照）。

もっとも教勢は比較的盛んであった。ある記録によれば 1845 年にはバートンのバプテスト教会の教会学校には 350 人もの子どもが在籍したと伝えられる。またメルボルン教会の牧師はフランシス・スミス (Francis Smith) であったが、彼は記録によれば日曜日に場所を変えて 3 回の礼拝と説教を行ない、世俗の仕事をしては次の伝道拠点まで 6 ~ 9 マイルを移動してと、日々精力的に伝道活動を行なっていたという。¹²

5、バートンのニュー・コネクションの相互バプテスマ執行について

元来のジェネラル・バプテストは、ソッツーニ主義などに傾斜していたこともあり、バートンのバプテスト達は、ジョン・スマイスの前例に従い、古いジェネラル・バプテスト教会地方連合に頼らずに相互に浸礼を受け合ったとの記録が残されている。¹³ バプテスト・マガジンによれば、ウィリアム・ケンドリックがジョーゼフ・ドニスソープと他の牧師に浸礼を授けると、ジョーゼフ・ドニスソープがケンドリックに浸礼を施したという記録がそれを示している。但しこのいきさつに関し

ては、今後詳しい調査が必要である。

6、バートンに生まれたジェネラル・バプテストの特徴

バートンのバプテスト教会の特色について考えてみると、その形成の諸事情からして、メソジストの敬虔な信仰を土台に、ウェスレーの立場に立ちつつ、カルヴァニズムの神学もよく理解し、特に改革者カルヴァンの「キリストの贖罪の普遍性」を十分認識していたことが推測される。しかもそこに、モラヴィアン的スピリチュアリティーの要素も豊かに併せ持っていたのであるから、この教会群は極めて敬虔な信仰（一種のピュリタン敬虔主義）を重視するグループであったことが推測される。

この教会群がパティキュラー・バプテストの立場に赴かなかった点は、これらの教会が、根底ではメソジストの影響を深く保っていたことから十分に伺い知ることが出来る。はじめに指摘した通り、ジョン・ウェスレーは修正アルミニウス主義的救済論に立っていたからである。またジュネーブの改革者カルヴァン自身の十字架の贖罪神学理解に立つことで、この群れはただ単にメソジスト派、モラヴィア派にも留まらず、ジェネラル・バプテストの「新しい団体」を構成する群れのひとつとなったことが推測されるのである。

成人浸礼の情報は、この時代、既に他のバプテスト教会の実践で広く知られていたわけであるが、従来の（オールド）ジェネラル・

バプテストとは別のルーツで、後の新しいニュー・コネクションの中心となる教会群がこの地に誕生したことになる。デーヴィド・テイラーが、何故兄弟団に対して批判的説教をしたのか、それはどのような内容であったのか、テイラーがそもそも何を考え、何を目指していたのかはなお不明である。メソジストでもない、兄弟団でもない別の道を模索していたとの推測も成り立つかも知れない。これらのことは、今後さらなる研究を要するテーマであるといえる。ただ、このテイラーの下に形成された会衆の中から、後のバートンのバプテスト教会が生まれたことだけは確かであり、その限りで、デーヴィド・テイラーの働きを高く評価することは可能であろう。

おわりに

今まで、18世紀のニュー・コネクションの存在は知られていなかった訳ではないが、それはヨークシャーのダニエル・テイラー（Dan Taylor,1738-1816、正式にはDaniel）から始まるグループのみの言及に留まっていた。とくにレスター・シャーのバートンにおける後のニュー・コネクションを構成するグループがこのようにして誕生し、後にダニエル・テイラーらと合同して大きな役割を果たしたいきさつなどは、ごく一部の研究者の間では議論されていたが、バプテスト史の中ではいつも忘れ去られていた。

このグループとはまた全く別に生まれたダニエル・テイラーのジェネラル・バプテストの群れ（南ヨークシャー、ワズワース）が存在したのであるが、18世紀イングランドのミッドランドで、信仰覚醒運動に促され、こうした新しいバプテストのグループが生まれ、こちらがやがて、17世紀の古い（リンカンシャーなどを中心として発展していた）ジェネラル・バプテスト（これを対照させてオールド・コネクションと呼ぶ）にとて代わり、後のイングランドの（パティキュラー・バプテストとの）「バプテスト同盟」設立(1891

年）に、多大な貢献をなしたことを見ても、この教会群の重要性が見てとれるわけである。

ダニエル・テイラーは1763年、リンカンシャーのボストン（Boston）のジェネラル・バプテスト教会と交わりを持ったが、この教会の牧師ウィリアム・タムソン（William Thompson）とは深い交流を保ち続け、新しいニュー・コネクション設立に際しては、ダニエル・テイラーとタムソンが一方の代表呼びかけ人となり、バートンのサミュエル・ディーコンらと会合を開いた。設立会には、ロンドンホワイト・チャペルに、双方より14教会の代表約20名の牧師が集まり、1770年6月6日、新団体ニュー・コネクションが結成されたのである。¹⁴

ジェネラル・バプテストはイングランドのピュリタン革命に際し、「良心の自由」とそれを保証する政教分離論で貢献しただけでなく、神の下における人間の平等論を根拠に、独立会衆派と議会派に神学的貢献を行ない、当時の国王の主張した「王権神授説」打倒に大いなる貢献をしたことが知られているが、これまでその初期の歴史しか紹介されることがなかった。今後、17世紀後半から、このニュー・コネクション成立後の、双方（オールドとニュー）の歴史と関係、またその歴史的貢献が、より詳しく解明される必要がある。¹⁵

注.

1 M.Watts, *The Dissenters: From the Reformation to the French Revolution*, pp.274-275,282-284.1978.

2 General Baptist Magazine, 1 (1798), and 2 (1799); Lro,1D51,Barton Chapel records.

3 Hayden, Roger, *English Baptist History & Heritage*, 1990. P.83 デーヴィド・テイラーはメソジストの信徒説教者、後述のダン・テイラーとはそもそも関係はない。

4 The Bedford Moravian Church in the eighteenth century : a selection of documents, ed., E.Welch, Bedfordshire Record Society,1989,p.56.

5 Two Calvinistic Methodist Chapels, 1743-1811:the London Tabernacle and Spa Fields Chapel, ed.,

E.Welch, 1975,pp.4-11.

6 Gen.Bap.Mag.,as n.8.1,pp.238,358.後述のように、それまでバートンでは成人バプテスマの例はなかった。尚、ジェネラル・バプテスト派が成人全身浸礼を告白した信仰告白は1651年の「初代の型」ならって集会する三〇教会の信仰と実践」四八条であり、バートンに「成人バプテスマ」の会衆が誕生する以前からそうした主張は知られていた。従つて、1745年頃に同じ主張を唱えた会衆が独自に生まれたと見ることが正しいと思われる。様式はimmersionであった。

7 Gen.Bap.Mag., as n .8 .1 , p.408.

8 Ibid.,p.326.

9 P. A. Hewitt, The Deacon Family of Leicestershire Clockmakers,1987.

10 R.W.Amblter, CHUCH, PLACE, AND ORGANIZATION: The Development of the New Connexion General Baptists in Lincolnshire,1770-1891, Baptist Quarterly,37 (1998),pp.240

11 J. H. Wood, A Condensed History of the General Baptists of the New Connexion: preceded by historical sketches of the early Baptists, p. 171.1847.

12 Gerald T.Rimmington, Baptist Membership in Rural Leicestershire,1881-1914., Baptist Quarterly,37 (1998),pp.402 以下参照。

13 Gen.Bap.Mag.,as n.8.1,pp.360.

14 同年、新団体は6条からなる「信仰箇条」(Articles of Religion)を採択し、これに同意することが入会の条件とされた。

15 R.W.Amblter, CHUCH, PLACE, AND ORGANIZATION: The Development of the New Connexion General Baptists in Lincolnshire,1770-1891, Baptist Quarterly,37 (1998),pp.241.

バプテストのイングランド市民革命における貢献について、この部分は筆者の論述であるが、大西晴樹「イギリス革命期のセクト」、近代ヨーロッパの探求3、教会。第1章などを参照。またこのような指摘は、E.Y.Mullins の The Axioms of Religion,1908の中にもあるので参照して欲しい。尚本稿はバートンにおける新しいジェネラル・バプテスト教会の発生に限定した研究ノートであり、バプテスト派の浸礼起源、またその発展などに関する事柄には改めて言及していない。